

原著：秋田大学医学部保健学科紀要11(2)：135-140, 2003

痴呆高齢者のコラージュの特徴と分析

湯 浅 孝 男 津軽谷 恵 石 井 奈 智 子
高 橋 恵 一

要 旨

知的機能と知的障害を持つ人々の評価のために工夫されたコラージュ得点と間の相関関係を検討するために2種のコラージュを本研究では使用した。コラージュとは雑誌などから切りぬいた写真を台紙に糊で貼りつける作品のことである。本研究で用いた一つのタイプのコラージュとは前述した通常のコラージュであり、他のタイプのコラージュとは写真の裏を厚紙で補強して底の部分を折り曲げて立つように工夫された素材である。

改訂 長谷川式簡易知能評価スケール (HDS-R) で測定された知的機能と写真の数やコラージュの中に見られたテーマとの間の相関関係を検討するためにピアソンの積率相関係数を用いた。立ち絵コラージュの場合には、長谷川式スケール得点と作成に使われた写真の総数、テーマの数そして互いに関連のある写真の数との間の相関係数は統計的に有意であった。痴呆患者群と他の疾患群を比較すると、コラージュ作成に使用された写真の総数、テーマ数そして互いに関連ある写真の数において有意差があった。以上の結果は全体としてみると、知的障害のある患者のコラージュ作品の特徴はより少ない写真数と少ないテーマ数であるといえるであろう。

はじめに

コラージュとはフランス語で、糊づけ (すること) を意味し、美術の技法の一つである¹⁾。行ない方としては雑誌やパンフレットなどから選んだ部分をハサミで切りぬき、台紙の上で再構成し、糊づけするという単純な方法であるため、子どもから高齢者まで絵を描くことがにがてな人でも取り組みやすい活動である。

臨床場面でのコラージュの利用は1970年代に米国の作業療法の分野から始まっている^{2),3)}。Buck と Provancher²⁾ はマガジン・ピクチャー・コラージュが投射法として患者の評価に利用できる可能性を検討し、絵の選択が自己イメージ、心的エネルギーそして精神的組織化能力を反映していることを見出した。Lerner と Ross³⁾ はマガジン・ピクチャー・コラージュの客観的評価法について検討し不安神経症や反応性うつ病などの精神科患者とコントロール群を比較した結果、患者群は使用切片数が少なく、全体的なバランス

に欠けていて人物の使用が少なかったと報告している。

痴呆高齢者に対するコラージュ療法の意義については山本⁶⁾は、コラージュはコミュニケーションの手段としてノンバーバルな面からも有効であり、さらには生きなおし療法や回想法的意義もあると述べている。高齢者は過去の思い出に親しむ傾向があるが、アメリカの精神科医 Butler⁷⁾ は過去への回想は意味のないものではなく、人生を見なおす積極的な意味をもつものであるとした。回想法の効果としては抑うつ感の改善、不安の軽減、人生満足度の向上、対人交流の促進などが報告されている。回想法では回想を促す昔の写真や民具等昔使われていた物などの様々な刺激素材を使用するが、コラージュの場合には写真や出来あがった作品が回想を促す素材ともなり、また互いに深く話し合う手がかりになると思える。

コラージュ作品の発達の研究としては杉浦⁸⁾と滝口等⁹⁾によるものがある。コラージュに使われた切片数

は幼児から高齢者までの変化過程としては幼児期から年齢が上がるにつれて数は増加し、中学生では一旦ピークを迎えて少し数を減らすのが高校3年では最大となり、その後成人、高齢者へと減少し、高齢者では幼児期とほぼ同数になっていた。このことは被検者の関心の広がりや知的能力などに関係すると指摘されている⁹⁾。作品に中心となる切りぬきが「あり」「なし」に分類すると、「中心あり」の作品は幼児から小学校までと高齢者で有意に少なく羅列的な作品が多かった⁹⁾。杉浦も中心性の有無については発達に伴い増加するが、成人では少し減少し高齢者では極端に減少することを報告している。杉浦と滝口等は他の側面についても検討しているが形式的分析でも内容分析でも発達的な変化が認められると述べている。

以上のようにコラージュは治療の手段や標準的発達との比較を通じた評価の手段としても有効と思えるが、コラージュ療法を痴呆老人に適用する例はまだ少ない。痴呆高齢者は環境の変化やなじみのない活動に対する不安感や拒否感をもつ者もいるため、現代風の雑誌からだけでなく高齢者が昔使用していた物やなつかしい景色の写真を使用して回想を促すことが活動に対する親しみを増す可能性が考えられる。また、痴呆の程度が高度になると貼りつけることを理解しなかったり興味をもたない場合がある。筆者等の臨床経験では発達遅滞児は平面の絵にはあまり興味を示さなくともペープサートのような立ち絵にすると興味を示す場合がある。このように痴呆高齢者の特性にあわせた工夫が必要と考える。

本研究の目的は知的機能に障害のある高齢者は知的

機能の障害がそれほど重くない高齢者に比べて表現特徴がどのように違うかをコラージュ作品を通して知ることにある。観点としては今回は知的機能と、素材の選択の仕方ならびに作品の中に現れるテーマとの関連を検討する。テーマという語は作品全体の主題という意味でも使用されるが、今回の研究では素材の意味的まとまりを言語化したものという限定された意味で使用する。使用する素材としては研究1では一般的な平面素材を使用した場合、研究2では立ち絵素材を使用した場合について検討する。

対象と方法

1. 平面素材使用の場合

秋田市内の介護老人保健施設に入所中の20名(女19名、男1名、平均年齢 82.5 ± 4.8 歳)を対象とした。本研究の当初は知的機能レベルと他の項目(切片数やテーマ数など)との相関関係をみることを試みたが、平面素材の場合は有意な相関関係が無かったので施設のカルテに痴呆と診断名が記載されている対象者とそれ以外の対象者の比較も行なった。20名のうち痴呆と診断されている者は7名で、13名は整形疾患、脳卒中後遺症他の診断名だった。痴呆群もそれ以外の疾患群も今回の研究に対象者として参加可能な程度の日常会話が可能な者だった。対象者の改訂長谷川式簡易知能評価スケール(以下HDS-R)の平均点は 20.6 ± 4.1 点で、最低点は11点だった。

昔の遊び道具(箱そり、めんこ、竹スケート、竹うま、蓄音機、人形)、食べ物(わらび、ぜんまい、干し大根、あけび、竹の子、干し餅、山ブドウ)、農機



図1 平面素材による作品例

表1 平面素材における痴呆群と一般群との各項目の比較

	年齢	HDS-R	総数	テーマ数	関連枚数
痴呆群 (n=7)	84.4±5.2	17.3±2.9	12.7±5.6	1.6±2.0	3.6±4.2
一般群(n=13)	81.5±4.5	22.4±3.5	14.5±3.8	4.9±1.6	10.2±2.9

** p<0.01

HDS-R：改訂長谷川式簡易知能評価スケール

表2 立ち絵素材における HDS-R と各項目の相関係数 (n=31)

総数	テーマ数	関連枚数	人物	風景	家具	種類
0.471	0.667	0.649	0.296	0.433	0.424	0.554
**	**	**		*	*	**

** p<0.01

* p<0.05

HDS-R：改訂長谷川式簡易知能評価スケール

れた素材の「総数」「テーマ数」「関連枚数」は研究1の場合と同様に定義してそれぞれの個数を検討した。知的機能（HDS-R 得点）と「総数」「テーマ数」「関連枚数」の各項目との相関を研究1の時と同様にピアソンの積率相関係数により検討した。研究2の場合は「人物」「風景」（家屋を除いた山・川・樹木・田んぼ道の総数）、「家具」（家財道具）、「種類」についても検討した。「種類」の数とは素材として提示された8種の内の何種類が作品作りに使用されたかの数である。種類については例えば家具の立ち絵だけを作品作りに使用した場合には、数個の家具の立ち絵を使用したとしても1と数えた。

結 果

1.平面素材の場合

HDS-R 得点と「総数」「テーマ数」「関連枚数」との相関を検討したところ有意な相関関係はなかった。痴呆群と一般群（痴呆との診断名がついていなかった対象者群）で比較すると使用された切片的総数は両群に差はなかったが、テーマ数と関連枚数に有意差があった（表1）。痴呆群では作品を作りながらの会話では話がどんどんずれていき、一つ一つの写真相互に関連のある話はあまりなく、ランダムな貼り方が多く、作品全体としても統合性がない者が多かった。会話では「なつかしい」とか「苦労した」と話しながら涙ぐんだり、昔の道具の使い方を熱心に説明したりなど個々の写真についての思い出話は成立して、貼り絵という活動に対する興味は全員が示していた。一般群では個々の写真についての話だけでなく、「○○だからこの写真とこの写真はここに貼ろうなどと、全体の構成を考えながら貼っていく人が多かった。

2.立ち絵素材の場合

HDS-R 得点と、総数・テーマ数・関連枚数・人物・風景・家具・種類との間のピアソンの相関係数を表2に示した。人物以外は全て HDS-R 得点との有意な正の相関があった。作品の構成の仕方では、HDS-R で高得点の者は、遠方に山・川・樹木などを配置し、一番手前に家の内部の様子を配置するなど、全体的にバランスがとれていて統合性があった。それに対して低得点者では家の内部や風景の位置がランダムであったり、全体の構成を考えることなく単に素材を台紙の上に並べたという者もいた。

考 察

平面素材を利用した活動の場合は痴呆患者の場合には素材を意味のあるまとまりとして組み合わせる場面を構成するよりも、一つ一つの物をつながりなく並べていく傾向があった。立ち絵素材を使用した場合には使用された素材は人物以外では知的機能が低下するほど減少し、しかも平面素材と同様にテーマをもって場面を構成するよりも互いに関連なく並べていく傾向がみられた。平面の場合でも立ち絵の場合でも知的機能の低下している者は一つ一つの物にまつわる思い出話はよくするが、互いの物や人を関連づけ、さらに全体も見ながら場面を構成する能力が低下していることが、テーマ数の減少、そして全体の構成の仕方に表れていると思われる。立ち絵の場合のテーマ数と HDS-R との相関係数は0.667と中程度の相関を示しており、本研究でいうテーマ数が知的機能の低下している患者の作品の観察の観点として有効なものと思える。平面素材では痴呆群と一般群とを比較するとテーマ数などに差がみられたが、立ち絵素材の場合のように知的能力との有意な相関関係はみられなかった。このことは平

面素材の場合は痴呆と診断名はついていても HDS-R では11点以上（平均では17.3）と中程度以上で、かつ、ちらばりが少ない対象者のために、会話をかわしながら場面を構成していくことには知的能力との関係を今回は見出しえなかった可能性がある。それに対して立体素材の場合は HDS-R の平均が17.5±8.4点で0点から29点とちらばりが大きく知的能力が大きく関連したと思える。以上のように対象者の特性が両研究で違うために、平面と立ち絵の素材の持つ特徴の比較は直接できなかった。立ち絵の特徴を検討するためには、方法論をできるだけ統一して比較する必要があるであろう。

痴呆患者のコミュニケーション能力は知的能力と平行して低下していき、痴呆患者では「挨拶をする」「名前を言う」「はい—いいえを示す」など習慣化された行動は重度な痴呆患者でも保たれているが、他人との相互作用の中で自分の考えや持っている情報を組織化するという能力が低下していく¹⁰⁾。本研究でみられたように知的能力が低下した対象者では一つ一つについては断片的に思い出話をするものの、全体的な統合性が失われていくというのも痴呆患者のコミュニケーション能力の低下と関係しているものと思える。痴呆患者のコミュニケーション障害に対する治療としては様々な試みがなされている。その中にはリアリティーオリエンテーション、ミリューセラピーなどの社会環境からのアプローチ等多様な媒体を介しての方法が取り入れられている¹¹⁾。本研究では思い出話という形式をとったために対象者には抵抗無く取り組んでいた。痴呆患者のコミュニケーション能力には様々な側面が関係しており、今回の研究のような視覚手がかりを記憶想起に利用して場面を構成しながら対話を進めるというアプローチも有効な可能性が考えられると思える。

本研究では素材は著者独自の物を使用して一定の刺激材料と一定の手続きでデータ収集を行なった。この方法は知的機能の障害のある高齢者の表現特徴の一側面を探ることに有効であったと思える。しかし一定の刺激材料と一定の手続きにより評価をして数値で結果を表すという方法には自ずと限界がある。箱庭では標準化という心理テストの原理といってもいい方法をとらなかったことに特徴があるが¹²⁾、コラージュも本来自由に自分の気に入ったものを選んで自由に作品作りをするものであろう。また特に他者との会話を要求するものでもない。治療として臨床場面で行なう場合にはより自由な状況で行ない、また分析についてもよ

り内面的な面も含めて行なっていく必要があるであろう。

文 献

- 1) 森谷寛之 (1999) コラージュ療法の実践. 森谷寛之・杉浦京子 (編) 現代のエスプリ コラージュ療法. 至文堂, 東京, pp.29-32
- 2) Buck RE. and Provancher MA. (1972) Magazine picture collage as an evaluative technique. *American Journal of Occupational Therapy* 26: 36-39
- 3) Lerner C. and Ross G (1977) The magazine picture collage: Development of an objective scoring system. *American Journal of Occupational Therapy* 31: 156-161
- 4) Lerner CJ (1979) The magazine picture collage: Its clinical use and validity as an assessment device. *American Journal of Occupational Therapy* 33: 500-504
- 5) Carter BA., Nelson DL, and Duncombe LW. (1983) The effects of psychological type on the mood and meaning of two collage activities. *American Journal of Occupational Therapy* 37: 688-693
- 6) 山本映子 (2003) 痴呆性老人とコラージュ療法. 第58回東京コラージュ療法研究会発表資料
- 7) Butler RN (1963) The life review; An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry* 26: 65-76
- 8) 杉浦京子 (1994) 基礎的研究 I 形式分析. 基礎的研究 II 内容分析. コラージュ療法. 川島書店, 東京, pp.55-124
- 9) 滝口正之, 山根敏宏, 岩岡真弘 ((1999)コラージュ作品の発達の研究 (集計調査). 森谷寛之・杉浦京子 (編) 現代のエスプリ コラージュ療法. 至文堂, 東京, pp.175-185
- 10) 綿森淑子, 竹内愛子, 福迫陽子, 他 (1989) 痴呆患者のコミュニケーション能力. *リハビリテーション医学* 26(1): 23-33
- 11) Bourgeois MS (1991) Communication Treatment for Adults With Dementia. *Journal of Speech and Hearing Research* 34: 831-844
- 12) 森谷寛之 (1993) 砂遊び・箱庭・コラージュ箱庭療法とコラージュ療法に関する雑感. 森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕 (編) コラージュ療法入門. 創元社, 大阪, pp147-155

Characteristics and Analysis of Collage Activities in Aging Adults with Dementia

Takao YUASA Megumi TSUGARUYA Nachiko ISHII
Keiichi TAKAHASHI

Course of Occupational Therapy, School of Health Sciences, Akita University

Two types of picture collages created for the evaluation of persons with intellectual dysfunction were used to investigate the relationship between the score of the collage and intellectual function. The picture collage is a composite of cuttings from magazines glued to a sheet of paper. The first picture collage used in this study is a regular style collage, and the second was reinforced with thick paper and constructed to stand by bending the bottom part.

Pearson's product-moment correlation coefficient was used to investigate the relationship between intellectual function measured by a revised version of Hasegawa's Dementia Scale (HDS-R) and the number of pictures and the number of themes found in the patient's collage. The correlation coefficients between the Hasegawa scale score and the total number of pictures that were used to construct a collage, the number of themes and the number of pictures that were related to each other were statistically significant for the standing picture collage. Significant differences were found in the total number of pictures that were used to construct collages, the number of themes and the number of pictures that were related to each other in collages made by the group of patients with and the group of patients without dementia. These results suggested that as a group, the collages of patients with intellectual deficiencies had fewer pictures, and tended to have fewer themes.